歩く喜び取り戻して

千葉大ベンチャー 人工股関節開発

日本人の体格考慮 患者の負担軽減

いつまでも自分の足で歩いてほしい――。千葉大発のベンチャー企業「カーム・ラーナ」（千葉市、中村順一CEO＝最高経営責任者）が、日本人の体格を考慮した人工股関節の開発に取り組んでいる。同大整形外科講師でもある中村さんは「股関節の疾病で歩けなくなっても、人工股関節で再び歩けるようになる。患者さんが歩く喜びを取り戻せるよう力になりたい」と話している。【山田利和】

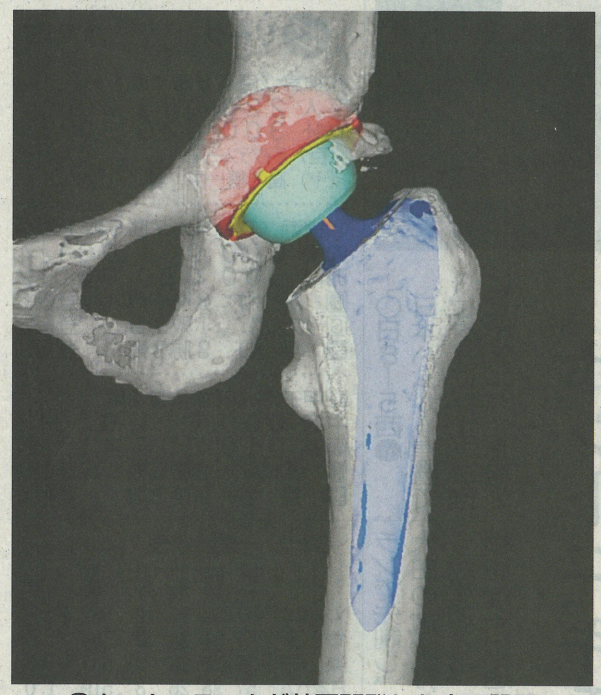
中村順一医師

股関節は足の付け根にある人体で最大の関節で、上半身と下半身をつないでいる。歩くためには欠かせない関節だが、変形性股関節症などで股関節が痛むと、歩くことが困難になり、最悪の場合は寝たきりになるなど、生活の質が大きく損なわれてしまう。

治療法は、変形した股関節を人工股関節に置き換える手術「人工股関節全置換術」が主流だ。日本で年間約13万人が受け、高齢化の進行で増加が見込まれている。一方、この手術で使われる人工股関節は欧米製が大半を占める。中村さんは整形外科医として自ら治療に使う中で、日本人に適した国産製品の必要性を痛感していた。欧米人に比べ日本人の体格は平均的に小さいため、欧米製品ではサイズが合わず、骨に挿入しにくいためだ。

変形性股関節症は女性に多いため、同社はいずれも医療関連の大手メーカー、サージカルアライアンス（東京都港区）やミズホ（同文京区）と共同で、特に日本人女性の体格に合わせた人工股関節「ミルフィー」を開発。「短い人工股関節であれば挿入しやすく、小さな切開で済むため患者さんの負担も軽くなる」と中村さんはその意義を説明する。中村さんはミルフィーで2019年以降、約1000人の患者を治療してきた。だが、こうした実績にもかかわらず中村さんは「医療機器だけに、安全性をさらに高め、より使いやすい物にしたい」と、千葉銀行「ちばぎん研究開発助成制度2020」などを活用してさらなる改良を進めている。

カーム・ラーナは、人工股関節を挿入する際、執刀医が手術しやすいよう患者の足を適切な位置に固定する手術台「ルキュア」も開発している。中村さんは「歩くことは健康にとって欠かせず、患者さんに優しい手術器具を提供していきたい」と話している。



㊨カーム・ラーナが共同開発した人工股関節「ミルフィー」㊧股関節に挿入されたミルフィーの3D画像＝カーム・ラーナ提供

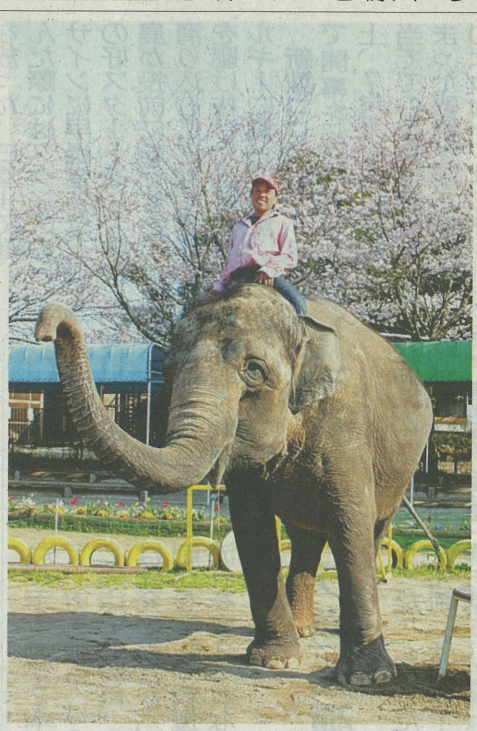
アジアゾウ洋子死ぬ

市原ぞうの国 国内3番目の高齢

市原市の動物園「市原ぞうの国」で飼育されていたアジアゾウの洋子が17日、老衰のため死んだ。推定年齢52歳で、国内のアジアゾウで3番目の高齢だった。

ぞうの国によると、洋子は13頭いるゾウの中で一番体が大きく鼻も長く、優しい性格で他のゾウたちからも慕われて大切にされていた。2019年7月から後ろ脚が不調で、ショーへの出演を控えていたが、14日に立ち上がれなくなり、17日夕方に飼育舎で息を引き取った。担当者は「24時間看護していた飼育員が離れた一瞬のうちに逝ってしまった。最期の姿を見せない洋子らしい気配りだったのだろう」。勝浦市にある関連施設「勝浦ぞうの楽園」の墓地に埋葬され、9月3日午後3時からぞうの国でお別れの会を開く。

洋子は、新潟県内唯一の本格的動物園だった月岡動物園で子どもたちの人気を集めていたが、1991年の閉園を控えた89年にぞうの国に引き取られた。ぞうの国には新潟以来の洋子ファンが絶えず、4月にも母娘が来園して「やっと再会できました」と喜んでいたという。【金沢衛】



元気な頃の洋子＝2009年撮影（市原ぞうの国提供）

御巣鷹 命のみちしるべ ⑥

真之介撮影

られて、歩を進めた。今年6月、私は田淵家

（専門編集委員）＝随時掲載

○枝肉 芝浦、キロ